

2014年 史学研究会例会 報告要旨

松尾充晶 「古代の祭祀空間—地域社会における神社の成立過程—」

古代の神社は自然物を信仰対象とする伝統的な祭祀空間の延長上にあることは確かであるが、それが自然発展的に成長したのではない。中央集権化の過程を重視する視座からは、地方の神社とは律令国家が目指した宗教的イデオロギー統制による政治的産物である、という点が強調される。具体的にいえば、7世紀後半に導入された神祇制度、特に天武朝を画期とする官社制・班幣制度によって（実効性には限界がありつつも）、地方の神社・諸神は天皇のもとに統属され、地域的な首長権と不可分であった祭祀権は国家に掌握統制される。こうした神祇制度の進展と、実際の地域社会での神社成立・整備は平行なのだ、と理解されているのである。

こうした一般理論を実証的に示すには、「地域首長が管掌する祭祀が解体・再編され、国家が管理する神社（一般には官社）が出現する過程」の実例を具体的にあげる必要があろう。しかし、そのような地方の神社について記す古代史料はほとんど無い。神社の実態を語る考古資料も極めて限定的なため、具体的な議論は深化していないのが実態だ。官社のあり方などは地域的な偏差が大きいため、まずは地域レベルでの具体資料に基づく分析が必要と考える。

そこで本発表では令制出雲国のエリアを対象に、6～8世紀の祭祀空間について検討する。特に、地域首長・集団との関係、祭祀空間の立地と形態、自然物と神社（特に社殿建築）との関わり、が主眼となる。その際には、天平5(733)年の『出雲国風土記』の分析が有益だ。風土記は399もの神社を網羅的に書き上げており、一定領域内の神社を分析するのに格好である。うえ、説話的表現ながら神が坐す空間についても記載がある。そこからは、神・社と人の空間との距離感などを、類型的に把握することが可能だ。

加えて風土記記載からは郡領氏族の具体的な所在分布、また地方行政上の中核施設となる郡衙や正倉といった官衙の位置、さらには駅伝路や駅など交通路の状況を知ることでもできる。これらと6～8世紀の考古資料、すなわち古墳や集落、生産、官衙、祭祀（神社）、交通などの遺跡とを複合的に検討することにより、社会の諸相のなかで、祭祀・神社がどのように機能し、変容していくかを示すことが可能と考える。特に、首長による祭祀と神社との連続性や、神社建築の出現過程は重要な論点であり、いくつかの類型的モデルを提示しながら検討を加えたい。

坪井 剛 「鎌倉期における専修念仏教団の形成と展開」

かつて、鎌倉新仏教論において法然の専修念仏思想は、民衆に浄土教を解放し、その後世救済の「祈り」を充足させる中世的な新仏教として高く評価された。そして、民間の仏教者である聖・遁世僧はその新仏教思想を民衆に浸透させる媒介者として捉えられ、平安・院政期浄土教の展開の上に法然は位置付けられていた。しかし、黒田俊雄氏により顕密体制論が提唱されるとその評価は一変する。つまり、旧仏教＝顕密仏教こそが真に中世的な仏教と措定され、その顕密仏教との関係から鎌倉新仏教諸派は「改革派」「異端派」として評価されることとなったのである。これにより、新仏教を支持したとされる民衆は顕密仏教を支える基盤として、新仏教を媒介したとされる聖・遁世僧は顕密寺院の周縁でその活動を支える存在として捉え直されることとなり、民衆の「祈り」を担った専修念仏の役割は、顕密仏教のイデオロギー支配からの「解放」を担うことに置換された。

この顕密体制論により、多くの研究分野が開かれ、中世仏教の多様な側面が明らかになったことは事実である。その一方で鎌倉新仏教運動については、その思想的営為にのみ価値が認められることとなり、その集団としての側面が追及されることはなくなった。専修念仏教団の宗派としての発展は、思想的妥協に依るものとされ、その僧侶集団としての発展は不明瞭なものとして残されている。本報告はそのような研究状況に鑑み、集団としての専修念仏教団がどのような形で形成され、展開していったのか、これを問題とする。

具体的には、京都で勢力を拡大させた証空門派、いわゆる西山派がどのように形成され、活動を展開させたのか、この点の追及から本論を始め、のちに京都に進出してくる良忠門派、いわゆる鎮西派と親鸞門派、いわゆる真宗門徒が既存教団との間で如何に勢力を拡大させたか、この点まで言及したい。

青谷秀紀 「中世ネーデルラントにおける聖地の表象と贖宥」

本報告では、およそ14・15世紀に相当する中世後期のネーデルラント（ベルギー・オランダ地域）を中心に、祈祷行為が人々の救済への期待と結びつきながらどのような信仰形態を生み出したのかについて考察を加える。キリスト教世界において、中世後期は煉獄思想の発展と相まって贖宥願望がひじょうな高まりを見せた時期であるが、神秘主義的な信仰形態が発展したネーデルラントではとりわけその傾向が強い。贖宥は罪の贖いの免除を意味し、これを生前に可能な限り多く獲得することで、煉獄における滞在期間の短縮が可能であると考えられていた。贖宥を得るために、信徒らはエルサレムやローマをはじめとする聖地に詣でるなどしたが、こうした手段を実践することが難しい者たちにも、中世後期のキリスト教世界では様々なオプションが用意されていた。瞑想によりエルサレムを思い浮かべキリストの受難を追体験する仮想巡礼や、特定の時期に巡礼地ローマの代替物と

して地方都市をローマ化する代替聖年、儀礼的手段により自都市を聖地化するプロセション（宗教行列）などがそれである。これらの行為を通じて、信徒らは、聖地の表象を自己の内側や外部の都市世界に顕現させ、自らの魂の救いを祈願したのである。かつてホイジンガは『中世の秋』で、この時期のネーデルラントに特有の内省的な信仰世界のあり方を提示して見せた。本報告では、近年の研究成果をもとに、別の角度からアプローチをくわえ、わずかながらもそれとは異なる様相を明らかにしてみたいと考えている。

水越 知 「中国近世の地方社会における宗教的空間—19世紀、重慶巴県を中心に—」

中国近世の宗教信仰に関しては、仏教や道教の影響力の低下、民間で祀られた祠廟信仰の発展、また同時に儒教を含めた諸宗教の融合したシンクレティズムの場であったという概括的理解がある。こうした状況から、中国では宗教間の対立や正統・異端といった問題が教義上の問題ではなく、国家や社会との関係のなかで政治的関係のなかで生み出される傾向がとくに強い。そのため中国近世の宗教について考える際にはそれぞれの宗教組織や施設、あるいは信仰そのものが実際社会と絡み合う部分の考察が重要になってくる。しかしこれまでの研究では、史料的な制約もあって国家の宗教政策や個別信仰の発展過程など、限定的な視点からの考察にとどまるものが多く、全体的な状況は十分に見通せていない。

また歴史的観点からいえば、中国近世の宗教信仰は伝統的価値観を象徴するものとして社会・文化史の重要な項目と見なされるものの、近世までの史料では実際社会における具体像は捉えることが難しい。一方で近代以降の地方社会の宗教信仰の実態は、きわめてリアルに描き出され、新しい宗教結社や飛躍的に広がるネットワーク形成などダイナミックな展開は近世の宗教信仰を静態的なものとして印象づける効果がある。仮に変化がきわめて緩やかだとしても宋代と清代はおおよそ同じ状況と考えてよいのだろうか。また近代との対比はどこまでが当を得ているのであろうか。

このような問題意識から、本報告では主に検討する史料として清代後期の地方公文書である『巴県档案』を取り上げ、日常的な宗教的空間の分析を進めようとする。巴県は現在の重慶市の中心部にあった県で、長江と嘉陵江の交通により発達した都市部と、その周辺の農村部とを含むため、都市と農村のそれぞれの宗教的空間を伝える史料が残されており、分析に適している。また文書の内容は地方官による政令と寺廟を舞台とした訴訟・紛争の類であり、従来検討されてきた地方志や碑刻史料からは知りえなかった実情が浮かび上がってくる。このように多岐にわたる情報を整理し、（1）地方官、（2）在地社会、（3）宗教関係者、の三者の観点を念頭に置き、地方社会の宗教的空間について、立場を異にしながらいっしょに空間を共有する人々の様子を再現し、中国近世社会のあり方にも展望を示したい。

横田貴之 「ムスリム同胞団の『行動の思想』—ハサン・バンナーを中心に—」

本報告の目的は、ムスリム同胞団 (Jam'īya al-Ikhwān al-Muslimīn) の創設者ハサン・バンナー (Ḥasan al-Bannā 1906-49) の論考分析を中心に、同胞団がメンバーの信仰心をいかにして組織としての集合行為へ動員したのかを検討することである。

1928年、同胞団は、「イスラームに奉仕するムスリムの同胞たち」のための組織として、エジプトで設立された。同胞団は創設から間もなく急速な発展を遂げ、1940年代末には当時人口 2,000 万人のエジプトで 50 万人のメンバーと同数の支持者を擁する同国最大の政治・社会結社となった。イスラーム教育を修めた知識人層が中心だったそれまでのイスラーム主義運動とは異なり、さまざまな社会階層の人々が同胞団に参加した。20世紀前半、最高指導者として同胞団を指導したバンナーは、社会改革に向けて実際に行動を取るよう強くメンバーへ訴えかけた。その「ダアワ (da'wa: 呼びかけ)」に応じたメンバーは、モスクやクルアーン暗証学校の運営のみならず、企業経営、ボーイスカウト活動、労働運動、スポーツ活動、理想都市建設など多種多様な活動に従事した。現在でも、同胞団内ではバンナーの「行動の思想」は非常に重視され、また実際の組織運営の基礎となっている。バンナー思想の分析は、同胞団研究において不可欠であるといえる。本報告では、『ハサン・バンナー論考集』などに収められた彼の著作を手掛かりに、行動と実践を重視する同胞団の思想構成を考察し、メンバー個人の「祈り」がどのように社会活動へ転化したのかを検討したい。